

ボクが女でひびく占め! 2

天草白



プロローグ

「んっ……!?!」

甘い感触に唇を塞がれ、ボク、相崎神楽は呆然としていた。
生まれて初めてのキス――。

アニメやドラマでしか見たことのない、その行為をボクがしている。されている。頭の
中はパニック寸前だ。

抵抗しようにも、手錠をかけられて両手の自由を奪われている。

「ちゅ、むう……んんっ」

相手の女の子はボクの両肩をがしつとつかんで、柔らかい唇を一心に押しつけていた。
かすかに息が吹きかかって、くすぐりたい。

おまけに蕩けるように柔らかい舌が入ってきて、ボクの舌にねっとり絡みつく。相手
の舌の温かな感触も心地よくて、頭がぼうつと痺れた。

どうしてこんなことに……?!

妖しい快感に浸りながら、ボクの記憶はちょっとだけ巻き戻る。

今日もボクは女装をして女子高に通っていた。
いや、これだけ書くと変態だと思われるかもしれないけれど、断じてそんなことはない、と強調しておきたい。

女子高に通うために仕方なく女装しているだけなんだから、ボクは。

そしてその原因となったのは――。

「今日も一日、はりきって百合^{ゆり}百合^{ゆり}なスクールライフを送るわよ、神楽っ」

死人なのに元気のありあまった声が響く。

声の主は、ボクの目の前でフワフワ浮いている桃髪ツインテールの女の子だ。

浮いている、というのは文字通りの意味だった。

彼女――刀真^{とうま}胡桃^{くるみ}ちゃんはボクに取り憑いた幽霊で、普通の人間には見えない。

見たり触れたりできるのは、ボクとごく一部の霊感が強い人間のみだ。

「百合百合な、って言われても、そもそもボクは男なんだから」

「神楽は見た目が女の子だから、あたし的にはOKよ！」

胡桃^{くるみ}ちゃんは人差し指をぴんと立て、にっこりと笑った。

「ってなわけで、あたしの百合ハーレムに入ってくれるような可愛い^{かわい}子はいねがー？　い

ねがー？」

秋田のナマハゲみたいな口調で、周りの女子生徒たちに熱い視線を向ける胡桃ちゃん。

百合ハーレム。

それが、ボクが女装をしてまで闇花^{やみはな}女学院^{じよがくいん}に通っている理由だ。

胡桃^{くるみ}ちゃんはその子が大好きな……いわゆる百合趣味を持った子で、ボクを女の子と間違えて取り憑いた。このままじゃ少しづつ生気を吸われ、ボクは衰弱死してしまう^{ただた}（崇りシステムというらしい）。

それを防ぐためには成仏してもらわなければいけないんだけど、その方法が百合ハーレムを作ることだった。幽霊は生前の望みを叶^なえることで成仏するんだとか。

ただ、胡桃^{くるみ}ちゃんには実体がないから自力で百合ハーレムを作ることなんてできない。

というわけで、彼女の望みを代わりに叶えて成仏してもらうために、ボクはここ闇花女学院に転入してきたのだった。

それから一ヶ月が経ち、多少慣れたとはいえ、やっぱりこの格好は恥ずかしい。

この間から夏服に変わった制服のスカートは下にスパッツを穿^はいていてもスースーするし、胸につけたパッド入りのブラジャーも違和感があって落ち着かない。

「はあ、なんでボクがこんな目に」

「文句があるならとっととハーレムを作りなさい。祟るわよ」

「もう祟ってるでしょ」
 空中をフワフワ漂いながらお気楽にハッパをかける胡桃ちゃんを軽くにらんだ。
 ボクは男の子なのに。

決して口に出してはいけない文句を胸の中に溜めこむ。

男だとバレたら退学――。

それはこの学院の理事長である叔母さんと、転入するときに交わした約束なのだ。

「あれ？ 変な気配がする……」

胡桃ちゃんは勝気そうなツリ目で周囲を見回しながら、眉間にしわを寄せた。

「どうかした、胡桃ちゃん？」

「霊の気配がするようないよ……んー、でも霊ともちよつと違うようない」

「……また悪霊とかじゃないよね？」

この学院に悪霊が現れ、大勢の生徒たちが襲われた事件から数日。あのとときの恐怖はまだ抜けきっていない。

「あ、邪悪な感じはしないから大丈夫よ」

「ならいいけど……」

「悪霊？ なんの話？」

「はうろううっ!？」

いきなり背後から胸を揉みしだかれた。

正確にはパッド入りのブラジャーを、ふに、ふに、と。

胸を直接揉まれてるわけじゃないとはいえ、視覚的にはそれに近い。なんだかボクが本
 当に女の子になって、同性からおっぱいを揉まれているように錯覚してしまう。不思議な
 妖しさが込み上げて、背筋がぞわりと粟立った。

「や、やめてよ、杏ちゃん。胸、揉んじゃダメえ……」

振り向かなくても声と行動で分かる。挨拶代わりにこんなセクハラまがいのスキンシッ
 プをしてくる女の子は、ただ一人――。

「おはよ、神楽ちゃん」

前方に回りこんできたのは、ショートカットの小悪魔的な美少女。クラスメイトの上柵
 杏ちゃんだった。

彼女もまた胡桃ちゃんのように百合趣味の持ち主で、しかも肉食系だ。転入初日から目
 を付けられ、以来毎日のように過剰で過激なスキンシップを受けていた。

「神楽ちゃんがあんまり可愛いから、つい。あ、私のも揉んでくれていいのよ」

大きすぎず小さすぎず、ほどよいサイズの二つの膨らみを、杏ちゃんは両手で持ち上げ
 るようにして揺らしてみせた。朝から刺激が強い光景にゴクリと息を呑む。

「大きさは並みだと思っけど、形には自信があるの。神楽ちゃんにすら揉まれても舐めら

れてもヨダレまみれにされてもいいわ、私……うふふふ」

「わわわ、な、何言ってるのさ、杏ちゃん」

露骨な誘惑に顔中が火照り、耳まで熱くなった。

「ささ、遠慮せずに」

「だ、ダメだってばあ」

「あいかわらず初心な反応ね。蕩かせてあげたいわ」

杏ちゃんは瞳をトロンとさせて、ボクを舐めるような目で見まわした。

「ほら、せっかく向こうから積極的に迫ってくれてるんだから、神楽も応えなさいよ。

ちゅーの一つもしてあげなさいってば」

「他人事だと思つて」

「据え膳食わぬは女の恥よ」

「男じゃなかったっけ、そのことわざ……わわっ!？」

胡桃ちゃんと小声で言い合っている間に、杏ちゃんがふたたび接近してきた。

甘い息がふうつと顔に吹きかかり、ますますゾクツとする。

「キスもその先も全部教えてあげる。大丈夫、女の子の体のことなら、隅から隅まで知り

尽くしてるから、ふふふ」

「はうう……」

逃げなきやと思いつつも、体が動かない。この視線がどうにも苦手だった。

「何をやっているのですか、あなたたちっ!」

甲高い声が響き、ボクと杏ちゃんは同時に振り返った。

校舎の前にごった返していた女子生徒たちがいっせいに左右に分かれる。

そのスペースを悠然と歩いてくる一人の女子生徒。まるで女王の行進だ。

いかにもお嬢様という感じの綺麗な縦ロールにした金髪が、歩調に合わせて軽く揺れる。

ついでに女子高生離れた爆乳も、ぶるん、ぶるん、と揺れている。

彼女の名前は覇世蔵涼花。この学院の生徒会長を務める三年生。容姿端麗、成績優秀、

スポーツ万能なうえに大金持ちのお嬢様、と三拍子も四拍子もそろった才媛だった。

こういう人が普通に生徒として通っているのも、さすがはお嬢様学院という感じ。

「神楽ちゃんと親睦を深めていただけですつてば、先輩」

杏ちゃんと会長は中学時代の先輩後輩らしい。そのころから校内の女子にセクハラを繰

り返していた杏ちゃんを、会長は目の敵にしているようだった。

「まともな親睦には見えませんでしたわよ。だいたい相崎さんも迷惑そうだったではあり

ませんか」

「えー、そんなことないと思いますよお」

「いいえ、相崎さんを不純な道に誘いこむことは許しませんわ。ゆえに、このわたくしが

あなたの風紀の乱れを正して——」

「あ、もしかしてヤキモチですか、先輩。先輩もひそかに神楽ちゃんを狙っているとか？」

「な、な、な……！」

会長の顔がカーツと真っ赤に染まった。

「お、女同士でそのようなこと……わたくしは、ただ彼女を正しい道に導こうと、それが上級生としての役目であり、生徒会長としての責務でもあり……」

「その割に妙に焦ってるのはどうしてですか？ ふふ、本当は神楽ちゃんのことを意識してるって告白しちゃってもいいんですよ？」

「わ、わたくしの気持ちはあくまでも親愛ですわ」

「いいんですよ、百合の世界に來ても」

「行きませんわよ！」

ホント、毎日毎日よく飽きないなあ……。

「神楽を巡って争う、二人の美少女！ 修羅場ね！ これこそ百合ハーレムの醍醐味よ！」

胡桃ちゃんが興奮した口調で叫んだ。

字面だけ追えばその通りだけど、百合でもなければ、ハーレム修羅場でもないと思うよ。「ほら、神楽も早く交じってきなさいよ。美味しい場面じゃない。いっそのこと三人で一緒にくんずほぐれつとか……じゅるり」

「胡桃ちゃん、ヨダレヨダレ」

苦笑しつつ、ボクは二人からそっと離れた。

毎日のように朝っぱらから杏ちゃんに迫られ、会長に怒られる生活はさすがに疲れる。

「あいかわらずモテモテだねー、相崎さん」

おっとりとした声に振り返ると、眼鏡をかけた三つ編みの女の子が立っていた。

彼女は並平乃波ちゃん。地味な容姿で、そばすが特徴といえば特徴かな？ クラスメイトで、この学院で一番気の許せる友だちだ。

平凡を絵に描いたような女の子だけど、何かとエキセントリックなキャラが多いボクの周囲においては、貴重な常識人枠といえた。

「さすがにこう毎日だと……あはは」

「杏ちゃんも悪い子じゃないんだけど」

「悪い子じゃないけど、肉食系すぎるんだよね……」

ため息をついたボクの背中を、乃波ちゃんがぼんと叩いた。

穏やかな笑顔に心が癒される。

「今のうちに教室行こっか」

「あっちは放っておいていいのかなあ」

ボクはわーわーと言い争う杏ちゃんと会長にちらりと目を向けた。

「だいじよぶだいじよぶ。ああなったら、しばらくやり合つてると思うし」
くすりと笑う乃波ちゃんと一緒に歩きたすボク。気配を殺し、絶賛言い争い中の二人の傍をこっそり通り抜ける。

気づかれないかヒヤヒヤしたけど、無事に二年花組の教室までたどり着けた。
まったく、朝からトラブルに巻きこまれちゃったな……といつても、これが日常茶飯事だから困ったものだ。

「あら、そう簡単には逃がさないわよ」

「えっ!？」

ボクの両手にはいつの間にか手錠がかけられていた。

振り返れば、にんまりと笑った杏ちゃんの顔。背後からこっそりボクに近づいて、一瞬の早業で手錠をかけたらしい。

っていうか、なんで手錠なんて持つてるの、杏ちゃん!？」

「お待ちなさい、上柵さんっ!」

さらに杏ちゃんを追ってきたのか、会長まで教室に駆けこんできた。さらにその取り巻きたらしき女子生徒たちが大勢詰めかける。

「先輩に邪魔はさせないわ。この四十八の百合技の一つ——『縛って捕らえて抱いてげっちゅー』で神楽ちゃんの唇を奪ってみせるっ」

がしつとボクの両肩をつかんだ杏ちゃんが、唇を突き出して顔を近づけてきた。

両手の自由を奪われたボクは抵抗できない。杏ちゃんの顔が間近に迫る。

艶々とした赤い唇に思わず目を奪われる——。

「だめええっ!」

ボクは横から突き飛ばされて、杏ちゃんの唇から逃れることができた。

「あ、危なかった。ありがとうございます、会長——」

お礼を言いかけて気づく。

今ボクを助けてくれたのは会長じゃなかった。

立っていたのは、一人の女の子。信じられないほど整った顔立ちは純和風で、腰の辺りまで伸びた長い黒髪がそんな容姿によく映えている。

身に着けているのは白と赤の巫女衣装。ただし袴がミニスカート風になっていて、すわりとした脚や太ももが剥き出しだ。見た感じここの生徒じゃなさそうだった。

突然現れた女の子に、ボクも、杏ちゃんや会長も目をばちくりさせている。

「ぶ、部外者がなぜここに!? この学院には厳重な警備が敷かれているというのに……ええい、責任者は何をやっていきますの」

会長が苛立った声で叫んだ。

「和風美少女……じゅるり。好みよ、好みだわ!」

「和風つてのも悪くないわね……じゅるり。蕩かせてあげたい♥」
 ……胡桃ちゃんも杏ちゃんもヨダレを拭こうね、とりあえず。

「やっと会えましたね。真冬、感激です」

目をウルウルとさせながら、ゆっくりとボクに近づいてくる彼女——真冬ちゃん。がしつと両肩をつかみ、ボクを正面から見つめる。

吸いこまれそうなほど深い漆黒の瞳を目にした瞬間、ボクは全身を硬直させた。見つめあっているだけで、頭がぼうつと痺れてくる。

真冬ちゃんが信じられないほどの美少女だからという理由だけじゃない。身にまとう霧囲気がどこか浮世離れしているってどうか。

あるいは——人間離れしているってどうか。

「ずっとお慕いしておりました、神楽さま」

かすかな吐息とともに、柔らかいものがボクの唇にふわりと触れた。

とても甘くて、蕩けるみたいにまるやかな感触に息が詰まる。

えっ……!?

一瞬、何をされたのか分からず、ボクは呆然と目を見開いた。

出会ったばかりの女の子にキスされてる——!?

さらに、温かな舌が口の中に入ってきた。

舌先でボクの舌をツンツンと突いたかと思えば、舌の裏を舐め取るようにまさぐってくる。さらに舌が巻きついてきて、そのままギュッと絞られた。

絡んだ舌から伝わる唾液の味が、かすかに甘い——。

気持ちよくて頭がぼうつと痺れた。下腹部に込み上げるゾクゾクとした快感。

だ、ダメだ、理性が飛んじやい……そうっ……。

「はううううううううううっ、な、何するのっ!？」

ボクは最後の理性を振り絞って後ずさり、全力で彼女から距離を取った。

ぜいぜいぜいぜいぜいと息を吐き出す。心臓が爆発しそうなほど鼓動を打つ。

唇に、火傷しそうなほど熱い感触がまだ残っている。

これがボクと真冬ちゃんとの出会い。

そしてボクたちの運命が大きく動き出す、その序曲だった——。

一章 キスから始まる押しかけ同居

「だ、誰よ、あの子……？」

「今、相崎さんとキスしてたわ……！」

「やだ、女同士で、しかも舌まで入れてるみたいだし……！」

周囲のざわめきにボクはハッと我に返った。

大勢の生徒が見ている前での大胆な行爲。しかも周りから見れば、これは女の子同士の

キスなわけで——色んな意味でまずい。

「ああ、ついに愛しい神楽さまと口づけを交わしてしまいました……真冬、幸せです」

そんな空気もまったく気にならないらしく、真冬ちゃんはうっとり頬を赤く染め、嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「初対面でいきなりキスしてくるなんて、顔に似合わず大胆な子……ああ、最高だわ」

うっとりした顔でつぶやく胡桃ちゃん。

まだドキドキしている気持ちをどうにか落ち着けて、ボクは真冬ちゃんに向き直った。

そもそも彼女は何者なんだろう？ どうしていきなりキスしてきたんだろう？

それに『愛しい神楽さま』って、ボクのことを知ってるみたいだけど——。

「ずるーい、神楽ちゃんの唇は私が狙ってたのにつ！」

杏ちゃんが駆け寄ってきて、ボクは頭の中に浮かんだいくつもの疑問を追いやった。

「ってことで、次は私ね！ その子よりも、もっとたっぷりじゅくりねっとり濃厚な

ディープキスで蕩かせてあげるっ」

「うわわっ、ち、ちよっと待ってえ」

杏ちゃんの唇が迫り、ボクは焦りながら後ずさった。

「やめてください。神楽さまの唇は真冬だけのものです！」

と、真冬ちゃんがボクの前に立ちはだかつて、杏ちゃんをにらみつけた。

「けちけちしないでもいいじゃない？ ふふ、あなたも蕩かせてあげたい♥」

ねっとりとした視線をボクから真冬ちゃんに向け直す杏ちゃん。

「女同士で、せ、接吻など……しかも神聖なる学び舎で……ああ、なんとということをつ」

会長が顔を真っ赤にしてワナワナと震えていた。

「わたくしにはこの学院の規律を守る責務があります。ゆえに、あなたを許すわけにはま

りません！ 不法侵入した上に、我が校の生徒の唇を無理やり奪うなんて……」

「不法侵入？ なんの話ですか？」

「ここは関係者以外立ち入り禁止なの」



最後まで立ち読みしてくれて
どうもありがとう！
続きは本で楽しんでね！